

か  
気象災害に打ち克つ栽培技術

近年、夏期高温の影響で米の品質低下や野菜の生育遅れ、豪雨によるほ場冠水の頻発が問題となっている。当センターでは、これら気象災害に打ち克つ技術開発に取り組んでいる。

酒米「山田錦」は、出穂後11～20日の気温と品質低下の関係が明らかとなった。但馬地域「コシヒカリ」で、遅植えと早植えを比較して、品質、収量面から移植時期選択の目安を示した。県南部では水稲

新品種「きぬむすめ」に転換して1等米比率、面積とも伸長させている。露地野菜では、豪雨を想定して冠水度合いと被害程度を明らかにして、事前の排水対策の重要性を提示した。ハウストマトでは着果率等を高める加湿冷却装置を開発したので紹介する。

松本 功（農産園芸部）  
（問い合わせ先 電話：0790-47-2412）

出穂期の気象条件と「山田錦」の品質

酒米「山田錦」の品質は登熟期間の初中期（出穂後11～20日）の気温の影響が大きく、乳白米や背白米はこの期間の気温が26.5℃以上で急増する。また、千粒重や精玄米歩合はこの期間の気温が24.5℃以上で低下する。

内 容

酒米「山田錦」は1998年以降、高温の影響で粒の充実不足や白未熟粒による品質低下が問題になっており、品質と気温との関係を明らかにした。

1 乳白米、背白米

2010年9月の平均気温は平年より2.1℃高く、「山田錦」でも乳白米や背白米が多発した。2010年の酒米試験地場内6カ所及び現地37カ所での登熟期間（出穂後11～20日）の平均気温と乳白米及び背白米の関係は図1、図2に示すとおりで、平均気温が26.5℃以上になると乳白米、背白米は急激に増加した。

2 千粒重、精玄米歩合

千粒重は出穂後11～20日の平均気温と有意な負の相関があり、24.5℃以上になると28gより小さくなる傾向が認められた。精玄米歩合も同様に、有意な負の相関があり、85%以下になった。（データ省略）

今後の方針

出穂後11～20日の平均気温が24.5℃以下となる登熟条件を組み込み、最適移植期や直播栽培での播種期を推定できる「山田錦最適作期決定システム」を開発中で、現地実証を計画している。

池上 勝（農産園芸部酒米試験地）  
（問い合わせ先 電話：0795-42-1036）

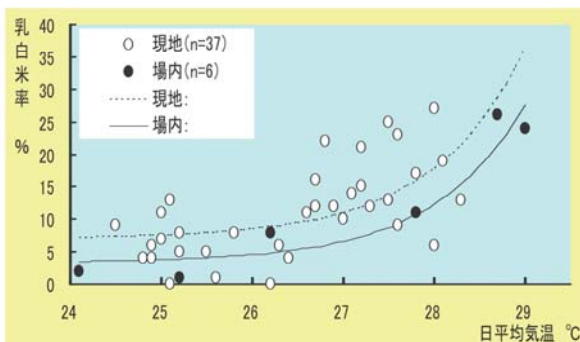


図1 乳白米率と登熟期間（出穂後11～20日）の日平均気温との関係

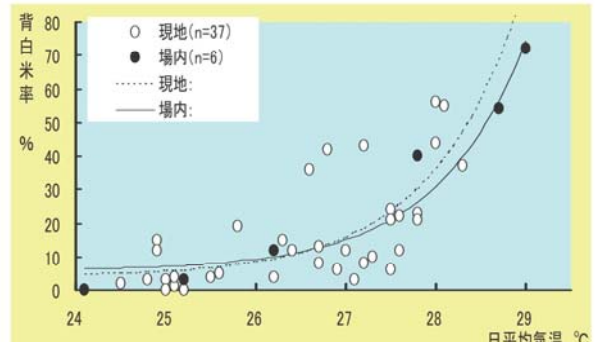


図2 背白米率と登熟期間（出穂後11～20日）の日平均気温との関係